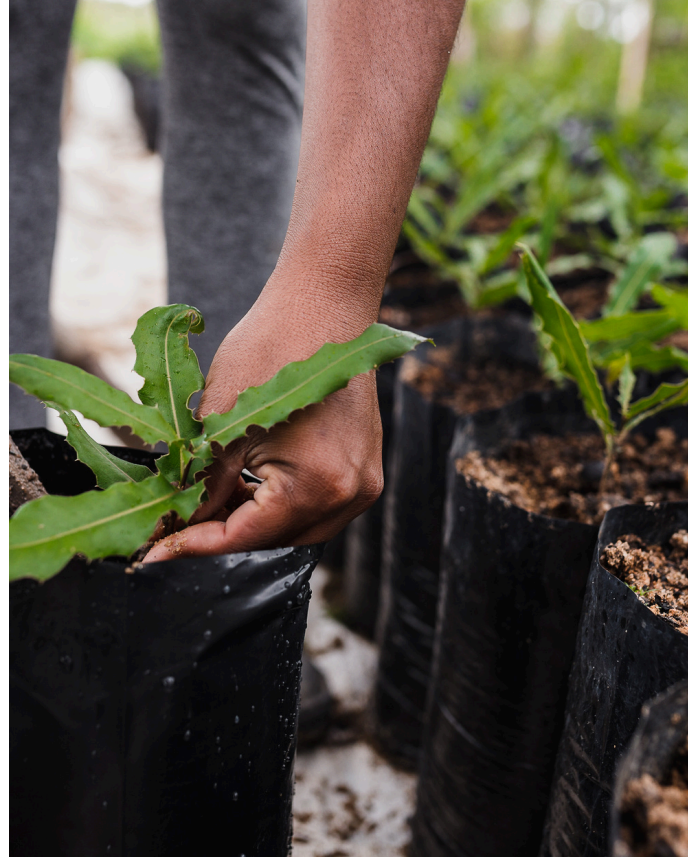


— NO216 1月号

# FOREST NEWS

未来を育てる木を植える  
未来を守る木を植える



## 2026年度 指標

- ①パンタナール地域における潜在自然植生の混植密植形式の植樹の実施
- ②国内において累計500本の植樹活動
- ③植樹を通じた環境問題解決のロールモデルをつくる
- ④セミナーや植樹祭を通じて「家族で木を植える」文化の啓蒙
- ⑤混植密植の植樹を推進する他団体との連携

NPO法人 地球の緑を守る会

発行人 藤生輝彦

〒182-0021東京都調布市調布ヶ丘2-15-1ビリアベルデ407号

Tel:042-449-0183

ホームページ <http://midori.mond.jp/>

## 「青年は荒野をめざす」2026年は内なる未開の地を開拓せよ

新年にあたり「青年は荒野をめざす」という話をします。この言葉は作家の五木寛之氏が1967年に発表した小説のタイトルです。新宿のジャズ喫茶で働いていた一人の青年が、トランペットを吹いて貯めたお金で、ニューヨーク、モスクワ、ストックホルム、マドリード、リスボンなどを放浪しながら自分が成長していく様を描いた当時のベストセラー小説です。

その時代から60年近くが過ぎた今、日本はあまりにも便利で豊かになりました。今の時代に生まれ育った若者たちには「荒野をめざす」という言葉は無縁かもしれませんし“コンビニ文化”が当たり前となっている今の環境から抜け出すことは容易ではありません。

所変わって、ドイツの若者たちは高校を出てもすぐには進学せず、1～2年外国を旅し、様々な経験をした上で進学先を選ぶといます。また、大学を出ても日本のようにすぐには就職せず、時間をかけ、世界を広く見渡し、熟慮して自分が進むべき方向を決めるそうです。

少子高齢化や労働力不足、子供や若者たちの貧困、地域社会の衰退、環境問題や教育格差、さらにはジェンダーギャップなど、今の日本の状況をブレークスルーするのは簡単ではありません。それならば、自分自身を少しだけ変えてみるのはどうでしょうか。そうすれば世の中もその分変わるのも事実です。

2026年がスタートしたこのとき、自分の「ポテンシャル」を見限らず、“荒野を開拓する”ことで“自らを開発する”、そんなライフスタイルを選択してみるのもひとつのチャレンジです。

あらためて、「ポテンシャル」とは、「潜在能力」「将来の可能性」「伸びしろ」を意味し、まだ表に出ていない内に秘められたエネルギーのこと。かつての小説のように海外へ飛び出すことだけが冒険ではありません。今の場所で、昨日までの自分を超越する一步を踏み出すこと。それこそが現代における「荒野」への挑戦であり、その小さな一歩が、やがてあなたの未来という大地を豊かに耕していくはずです。

## 1. 日本の林業が抱える「構造的矛盾」

日本の森林の約4割を占めるスギ・ヒノキの人工林は、木材価格の低迷と高齢化により、その多くが手入れされずに放置されています。これらは経済価値を失っただけでなく、根が浅いために豪雨による土砂崩れを招き、野生動物の出没、花粉症など生物多様性を損なうという「負の遺産」と化しています。従来の「切って売る」ことだけを目指す林業モデルは、もはや限界に達しています。

## 2. 「森林環境税」の導入と新たな役割

そんな中で2024年度から本格導入された「森林環境税（1人年額1,000円）」は、使い道や不透明さへの懸念」という厳しい視点もあります。

反面、この税金の使途が「経済林の維持」だけでなく、手入れが困難な放置林を、公的な管理によって環境保全林へ転換することに充てられている点など、日本の森林管理にこの行き詰まりを打破するための重要な財源となりうることを感じます。ここで、当法人が取組んでいる「宮脇式植樹」の思想が重要な役割を果たすのではないかと思います。



人工林を、自然度を高める取組み

## 3. 「宮脇式」と現代政策の合流点

宮脇式は、その土地本来の植生（潜在自然植生）を多種類混植・密植させることで、短期間で「本物の森」を再生する手法です。この手法は、以下の3点で現在の国策と強く共鳴しています。

### ①防災と強靱化:

森林税を活用し、住宅に近い危険な人工林を、深く根を張る宮脇式の「防災林」へ作り替える動きが進んでいます。

### ②30by30の達成:

2030年までに陸の30%を保全する国際目標に向け、多様性豊かな宮脇式の森は「自然共生サイト」としての価値を認められやすくなっています。

### ③企業のESG投資

森林税という公助に加え、企業が自社のカーボンニュートラル達成のために、宮脇式の手法を用いた森づくりに出資するケースが急増しています。

## 4. 二極化による共存と未来の展望

以上のことを踏まえて今後の日本の林業は、経済林として、スマート林業やエリートツリーを導入し、徹底した効率化で「稼ぐ林業」を実践する方向性と、保全林として、森林税や企業資金を投じ、宮脇式の手法等を用いて、手入れ不要で災害に強い「守る森」を再生するといった2つのアプローチを重ねることで未来の展望をみることができると考えます。

スギやヒノキばかりが並ぶ景色から、宮脇式が理想とした多様で力強い『本来の森』を取り戻すことは、安全な国土を未来へつなぐ大切な一歩です。森林税を追い風にかえて、私たちの活動が、日本の環境問題にひとつの希望の光を灯し、確かな答えを示していけるよう、これからも心を込めて実践を続けてまいります



東京の中心、大手町につくられた本物の森

先月に引き続き、竹林整備ボランティアに参加しました。今回の活動場所は、鬱蒼とした竹林の中で本格的な伐採作業となりました。

午前中は竹の伐採に汗を流し、昼食を挟んだ午後は伐採した竹を用いた「手作り竹ぼうき」の製作を体験しました。竹をただ廃棄するのではなく、炭にしたり生活用品に加工したりすることで、資源を「循環」させる大切さを肌で感じる時間となりました。また、非日常の大自然の中での作業は、日頃のストレスから解放され、心身ともにリフレッシュできる格別な機会でもあります。

これは「潜在自然植生」の生命力を示す象徴的な光景でした。現在、放置された竹林が周囲の森を侵食し、山の保水力や多様性を奪う問題が深刻化しています。伐採後の未活用地をそのままにせず、そこにその土地本来の樹種を「植樹」することで、より強靱で豊かな「本物の森」へと再生できるのではないか――。

活動の締めくくりに頂いた、ボランティアの方々による手作りカレーの味は、大自然の空気も相まって最高のご馳走でした。竹林整備という一歩から、次世代に引き継ぐべき豊かな森の姿を、改めて見つめ直す一日となりました。



千葉の竹林伐採場所



手作り竹ぼうき



竹のお皿でカレーを満喫



ボランティアで切り出した竹

地元の方々はこの活動を約16年間も継続されているとのこと。当日は親子連れの小学生を含む約20名が参加し、世代を超えた交流の場となっていました。

作業中に気づいたことがあります。かつて伐採された跡地のすぐ横で、広葉樹の苗木が自然に芽吹き、育っていたのです。

竹林整備という一歩から、次世代に引き継ぐべき豊かな森の姿を、改めて見つめ直す一日となりました。他団体の活動から多くのことを学びました。今後も船橋支部では、植樹にまつわる活動をしている他団体とも連携して、千葉県を本物の森に生み変えていきたいと思っております。



竹を伐採したまわりに芽吹く広葉樹の苗

